

＜幼稚園での一例：動物飼育活動活用教育の年間の流れ＞

ねらい：子どもの園生活の中にその年齢・発達にあった動物を身近に飼って、保育士の支援のもと楽しませ世話に関わらせることで、心を安定させる
 人間関係改善や促進・探究心・言葉などの発達への刺激となり、表現活動にも展開できるように期待する
 支援システム：保護者の休日の世話と獣医師会との契約による助言・支援システム

	4～5月	6～7月中旬	7月下旬～8月	9～10月	11月初め	11月中旬～1月	2～3月
動物の状態	新しく世話する人になれていない	暑さと湿気に弱い	休日の世話不足で弱がち	食欲が増し太る	寒さに向かって、栄養をつける	寒さと正月休みのための、凍死・餓死を避ける	春休みに世話不足に注意
必要な動物への配慮	風囲いを4月半ばに取り去る	落葉樹の下など風通しの良い場所におく	あまりに暑い時や湿気の多い時は、冷房を考える	行事が多い季節だが、世話を忘れな(生命尊重)	風囲い・木製の巣箱,あるいはダンボール箱をいれる 休日の世話確認。	風囲い 巣箱 餌の充実 休日の世話	風囲いや巣箱を継続 休日の世話分担を準備しておく
3歳児 動物種	(ねらい)教師や安心できるお友達 物や場所に親しみ 安定して過ごす (内容) 飼育小動物と出会う 安心して楽しむ(意図して親しませる) (効果) 小さい生き物に対する心遣いの芽生え 自然への関心 動物の反応への探究心などの発達						
小鳥	(活動の一部) 世話の簡単なセキセイインコなどの小鳥を、ケージに入れて身近に置く 保育士と一緒に見る 保育士が小鳥の世話するとき一緒にお話しながら見ている 小鳥がさえずると、一緒に歌うなど、一緒に生活を楽しむ 自分でみつけたハコベやその他の草をつんでケージに差し入れて、食べるのを楽しむ 草にも関心が広がる 季節が寒いときやとても暑いときは、指導者を手伝ってケージを園舎の中に入れたり、暖かいときは外に出したりして、体への気遣いを子どもに見せる						
4歳児 動物種 モルモット	(ねらい) 興味や関心を持ったことを取り入れながら、遊びを広げていく (内容) 飼育小動物に興味をもってかかわり、親しむ (効果) 愛情 友達との協力 探究心など 多岐にわたる発達が見られる						
活動	最初に関心と親しみを養うため(ふれあい教室)をする 教室の外(テラス)に飼う やりたい子が先生と一緒に世話をする 先生と一緒に、部屋の中で抱っこする ランチ前には友達と一緒に片付ける	休み中は交代で、保護者と一緒に、家庭で世話をする 家庭での共同作業として、良い体験に	動物園への遠足 動物への知識や体験の広がり刺激する 絵や劇などの表現活動に動物や動物体験を活用する 日常の世話は、先生と一緒にいう	冬休みは家庭に預かって保護者と楽しむ	・5歳児の世話しているところを、一緒にみて来期の自分たちの飼育活動を知る ・モルモットは、下級生に世話してもらうので、動物との別れを体験する		

	4～5月	6月下旬～7月	8～9月	10～11月初め	11月中旬～1月	2～3月
5歳児 動物種 鳥類 チャボ	(ねらい) 生活に見通しを持ち自分たちで進めていこうとする 自分達が庇わなければならない動物たち (内容)飼育動物の世話をし、生き物と深くかかわる (効果)愛情をもって接し、動物を良く観察できるようになり、言葉を持たない動物が喜ぶように工夫をするようになる 生き物への知識が増える 命への対応を覚える					
活動 チャボ	(4歳児の終わりに上級生の世話をしている) ・ふれあい教室を受ける ・グループ作りに動物が役立つ	土日の世話・長期休業時は 交代で、保護者と一緒に登園して動物の世話を する 家族の行事として案内し、楽しんでもらっている。	9月・観察が細かくなり様々な発見や疑問を見つけて気遣いをする 知識が増える (獣医師への質問会：病気の手当てと園児への説明 飼育指導、死亡時の死因の説明と埋葬支援など、園児の質問や要望に応える) ・ 劇、絵などに表現する。	冬休みもすべて保護者と一緒に子どもが世話に関わる	卒園まで、いとおしんで世話を する 卒園式 今までの園生活や活動を振り返る言葉を述べる時、必ず飼育活動を入れる	
留意点	○保護者に年度初めに飼育活動の教育的目的を説明し、支援（教育参加）をするように案内する。アレルギーなど困る点についても調査して対応を考える 愛情のある動物飼育体験は、子どもの成長に大きな効果を上げることについて、共通理解を得ておく 「大人の思惑を超えて、子どもは動物と心を直結させる」ことをふまえて、対応する。（子どもの心配にすぐに対応する） 自分の気持ちだけで、動物をおもちゃにしないように、小さいものへの気遣いを培うために、動物の気持ちや何を考えているかを、子どもと語りあう（お友達への気遣いに通じる） その子の反応に応じて、なでさせたり抱っこさせる 楽しい印象を大事にして、嫌がる子には無理強いせず楽しさを見せるにとどめる 「世話は、5歳児の2学期くらいで一人でもやれる」との誇りを持たせるのも良いが、幼児期は、「教師と一緒に飼育し、楽しむ」というスタンス無理をさせず、なにより動物への興味と愛情、弱いものを庇う気持ちを培うことを大事にする 動物への好奇心に答えていく(獣医師の活用) 子どもが動物を心配したとき、教師がそれをすぐにうけとる 専門的なことは獣医師に依頼して子どもの心配を収め、対応する 獣医師の専門的な知識と技術は子どもたちに、大人の一つのモデルを示すことができる 地域の獣医師と信頼関係を構築する 自動車は、常に動物の様子や反応を見ながら、命を守る態度を示す（子どもへの観察と対応する力にもつながる）					